

センター長就任に際して

宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センター

センター長 鈴木 勲

この度、宇都宮大学教育学部附属教育実践総合センターのセンター長に就任するにあたり、歴代のセンター長および学部長の本センター発展へのご尽力に感謝しますと共に本学部および栃木県小・中・高等学校等との連携協力に微力を尽くすべくご挨拶申し上げます。

本センターは私自身が赴任した 1972 年に 1973 年度概算要求として認められた「閉回路テレビ」設置が始まりであり、その任務の一つが「閉回路テレビ」の教育実習指導への利用であった。その当初の任務の先見性を追うように、1976 年の教育工学センターおよび 1985 年の教育実践研究指導センターへの改組を経て、2000 年の改組で今日の教育実践総合センターに至りました。その時代の要請に応じてセンターは名称変更とともに変革を図ってきた。振り返って我が身と比較すれば、その変革を担ってきた歴代の学部長・センター長に敬意を表したい。

本センターの変化・変革は学校教育における課題あるいは教員養成を含む教師教育の中で求められている課題の変化でもあった。教員養成大学・学部に期待される課題が教育実践総合センターに期待されている役割と重なることになろう。情報通信技術等の発展と IT を利用した教育の推進と共にいじめ・不登校などの学校現場にとって大きな課題となっている生徒指導・教育相談等の実践を含む臨床分野の課題である。

また学生の実践的な指導力の養成のための教育実習の内容・方法等のあり方、教授方法の改善・教材研究等の様々な課題が「実践」を冠としている本センターと共に教育学部の課題であろう。強い者が生き残るのではなく、変化できる者が生き残り、それを構成している我々も変化を要請されることになろう。

センター長就任を機会に個人的な本センターとの縁を思い出した。教育工学センターへの改組も間もない 1979 年度入試から共通 1 次試験導入が決定され、教育学部小学校教員養成課程は第 1 志望から第 4 志望まで専修別の合格発表（1979 年 3 月）を行う方向であった。それまでは小学校教員養成課程として合格者発表した後の 4 月の教授会で第 1 志望から第 4 志望までの専修を決めていた。当時の換算委員として入試判定の手作業から生ずる誤りを懸念し、センター唯一の専任教員であった石川賢先生（現附属中学校長）と共に 1978 年度入試判定成績処理を手作業と併行してセンターの電算機（OKITAC-50/40）で成績処理を試みた。その試行で入試判定資料の手作業処理に伴う危険性が顕在化し、先行した電気通信大学を見習っての全学的な電子計算機による入試判定資料の作成につながった。

この度図らずも本センター長就任を機会に、本センターとの奇しき縁を思い出した次第である。本センターが時代の要請に応じて変革しながら宇都宮大学・教育学部と共に発展するために、教育学部の先生方のご協力・ご援助もお願いする次第である。